

知らないひと  
&  
知ってるデジモン

知ってるひと  
&  
知ってるデジモン



「久々だな、ヴォーボモン。  
ひとりか…勇太は、どうしたんだ？  
おいブイモン、なに照れてんだよ。  
ほらっ。」

「知ってるひと!!!」

叶の後ろから、ブイモンが照れ臭そうにもじもじしながら出てくる。

「へへ…ヴォーボモン久しぶり。」

み…見た、俺また完全体まで進化できるようになったんだぜ…!。」

「知ってるデジモン!!!」

「ヴォーボモンだよね!僕、僕!ジャザモン!!覚えてる!!!」

「知らな…いや、知ってるデジモン!!!」

「こんにちは!わたし、浮状 希理江 12歳!!!」

少女は、ぐいぐいとヴォーボモンとの距離を詰めてくる。

「……誰?このひと!!」

「あなたが、ヴォーボモンだね!!!ジャザモンと叶くん達から話聞いているよ!!」

「誰!」

「勇太ちゃんと光ちゃんとデビドラモンちゃんと一緒に旅してるんだよね!」

「ねえ……!!誰なの?怖いよおッ!!!!」

「仲良くしようね!!!!!!!」

「いやああああ光と同じ歳なのにおっぱいが全然違う!!!!怖いよおおお!!!勇太アアアアアアアア!!!!!!!」



「ジャザモン～!!ほんと!久しぶり!!街を急に出てって寂しかったんだから!

あっそうだ!僕飛べるようになったし!自力で成熟期まで進化出来るようになったんだよ!!」

「…」

「なんつー、表情で見てるんだ…ブイモン。」

別にいだろ…お前だってジャザモンとは友達なんだろう?」

「…なんか、俺の友達が、俺抜きで楽しくするとザワザワする…。」

「なら、お前も絡んで来い!」

「うわ!」

叶がブイモンを押し出し、ヴォーボモン達の間突っ込ませる。

「ブイモンも久しぶり～。」

「ブイモンも遊ぼ～。」

「あああああ…。」

「凄い表情になってるね!ブイモンくん!ね!叶くん!ね!」

(デジモンとティマーって似るもんだな…。)

「…それで、ヴォーボモン。」

死んだ筈の勇太の存在を本当に感じたのか?」

叶の言葉に、ヴォーボモンも真剣な顔になって向き直る。

「うん、ファクトリアタウンに着いて暫くした時なんだけど、勇太と繋がる感じがしたんだ…多分…きっと。」

確信って程じゃないし、言葉に出してなかったけど光達が思ってるようにただの思い込みかもしれない…でも、なんだか…、ごめん叶。

やっぱりただの言い訳だよ…僕が勇太を守れなくて、こんな妄想みたいな勘違いしてるんだよ…。」

「…ふっ。」

申し訳なさそうなヴォーボモンに、叶は優しく微笑んで跪いて目線を合わせる。

「お前は悪くないさ、逆に勇太の無茶に付き合わせて申し訳ないなと思ってるくらいだよ。」

それに、その繋がりはずっと嘘じゃない。

俺やブイモンにあるように、きっとお前のだって嘘じゃないさ。」

「わたしとジャザモンのものね!

頭じゃなくて心の言葉って根拠はないけど馬鹿にはなりたいと思うよ!」

「それに頭で考えても恐らく勇太はマ現実世界…テリアルワールドにいる。」

話を聞く限り、お前が真っ直ぐにムゲンマウンテンに向かって来たのは偶然じゃないさ。」

「叶…希理江。」

「さ、そろそろ日も暮れる。」

ここは安全そうだし、今日はここでキャンプだ。」



周囲の安全を確保し、ヴォーボモン達は、食事を済ませ、今は希理江達と毛布に包まり温まっていた。

「ヴォーボモンくん温かいね！ジャザモンは冷たいね!!」

「そうだよ～、昔も皆んで寒い日はヴォーボモンにくっついてよく温まってたよ。

でも、熱伝わってそのうち僕も温かくなるよ。」

「ぶ～、僕は知ってるマウント…。」

「まだ、ぶ～垂れてる。」

「ふふ、みんな可愛いね！ね！叶くん！」

「そういえば、叶ってココア好きなんだね～。」

「うん？ああ？そうだな。」

「勇太が、言ってたけど叶はコーヒーのブラックで飲んでるって言ってたけど、勘違いしてたのかな？」

「いや…あいつの前じゃコーヒー飲んでたんだ。」

「なんで？」

「…恰好付けたくってな。

あいつの頼れる兄貴でいたい…いや、負けたくなかったんだ。

少しでもあいつより大人で凄いんだぞって…馬鹿な事してたよ。

ただ、あいつに殴られてからもうやめたんだ…そんなの必要ないってな。」

「でも、砂糖入れすぎだよ！角砂糖毎回 5,6 個入れて何倍も飲んでるよ！今はいいかもしれないけど若いのに糖尿になっちゃうよ！」

「はは…希理江さんって結構母さんみたいな言うよね…。」

「勇太もココア飲んでる時、同じくらい砂糖入れてたしやっぱり似た者同士だね！」

「ふふ、そうだな…、確かにあいつも甘党だしな。」

すみません…



「そういえば叶ってデーモンのゲート潜ってどこ行ってたの？そこら中天使だらけで、ブイモンも怪我してたし、大丈夫だったの？」

「うん？ああ…？」

俺達はシオンにいなかったんだ。

デーモンの爺さんも勘付いて、気を使ったのか、ノーマルサーバーに飛ばされてんだ。まあ、そこで色々な…ガキの世話を…、はあ～。」

「？」

叶は、何かを思い出したように溜息を吐いた。

「そこで、マグナモンってロイヤルナイツが接触してきて…ああ～、セキュリティだからここ（シオン）でいう三大天使…ケルビモンみたいなもんだ。

ブイモンがデーモンを倒せるような進化をしたのは、ケルビモンの力だけじゃないのは分かったが、そのひとが力を貸してくれてたんだ。

そんなひとにあいつは…はあ～。」

「？」

「なんでもない…お前も分かってるように、今サーバー間の移動は制限されてシオンは鎖国状態だ。

それはタイマーだけじゃなくて、デジモンも一緒にしてくて、ロイヤルナイツ達も天使を警戒してシオンに介入したがってるができないそうさ。

他にも色々しがらみがあるみたいけど。

そこで、俺にお前達を助けてやれってさ。」

「叶は良かったの？その…やっと落ち着いたのに。」

「お前達が、頑張ってる時に俺だけ逃げてれば…それこそ何も変わってないさ。」



「それでね!戻ってきた時叶くん空から落ちて来たんだよ!」

「え?」

「…ゲートの通り道が歪んでるせいか、マグナモンが天然だったのか…空に落とされてな…死ぬかと思った…」

「私はね!DWの地図をジャザモンと一緒に作ってるんだ!

そしたら空から叶くん達降って来て驚いたよ!」

「希理江の飛び降り癖も治ったから、久々に落ちてくるひと拾ったよ。」

「わたし達も天使に襲われてたし!困った時は助け合いだよね!」

「…なんか、回想に凄いノイズが混じってる気がしたんだけど…」

「ヴォーボモン、ちょっとこっち来てくれ…」

叶の手招きにヴォーボモンが寄って来る。

叶は小さな声でボソボソと呟く。

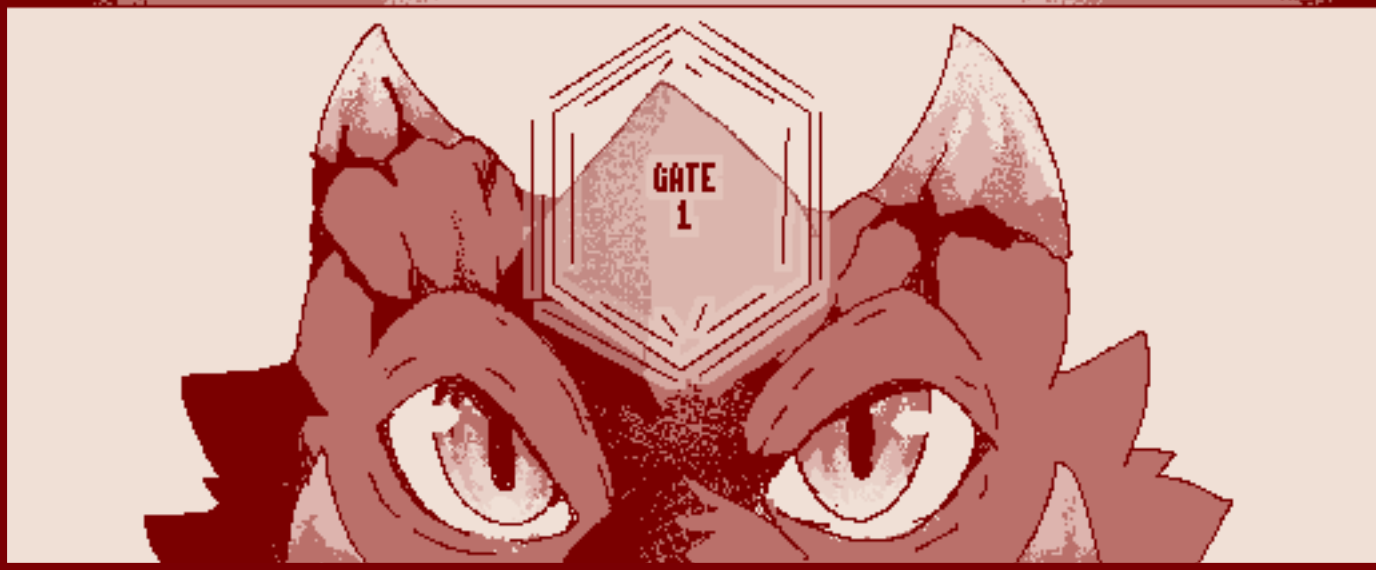
「最近、やっと遠回しにパンツを履かせる事に成功したんだ…なんか彼女ずっと海外で色んな文化渡り歩いてみたいで…ただ、まだブラはしてくれなくて…なんとか言えないか?

ブイモンとジャザモンは分かってないみたいで…」

「勇太も光が大股広げて座るの僕に咎めさせようとしてたけど、僕だってそこら辺分かってるから…普通に恥ずかしいから嫌だよ…あの時だって光に蹴られて嫌だったし。」

「…そうか。」

苦虫を潰したような顔をする叶は、勇太にそっくりだとヴォーボモンは思った。



「さて、明日からの事だがヴォーボモン端的に言うこのゲートを突破するのは諦めろ。」

「…なんで？」

「まあ、聞け。」

DWにはMWに続くゲートが幾つかある。

俺と希理江さんが確認したゲートは全部で7つ。

鬼塚達と合流する前に、こっちに誘拐された人達を帰せるルートを見つけてたんだ。」

「誘拐された人達の事、叶は知ってたの？」

「ルクスモンに聞いててな。」

…それで、そのゲートには全て天使が強固な守りを固めている。

ジャザモンとブイモン…はちょっと違うが、究極体相当の力を出せる。

現地のデジモンに協力を申し込めば2から7のゲートなら30%位の確率ならお前をMW…勇太の元に送れる。」

「…だけど、このゲート1はおそらく1%もないかも。」

「なんで？」



「このゲートを守っているシスタモン・シエル。  
あいつがいるからだ。」

「シスタモンって成熟期だね？」

「勝てない道理ってない？」

「…わたし達も最初そう思ったんだけど…。」

「一回不用意に接敵しちゃったんだ…。」

「正直、俺達殺されるかと思ったよ。」

まわり見ると他の天使達の死体っぽいのも転がってたし、シエルが動いてる間は誰も寄ってこなかった。

…いや、不用意に寄って来たスラッシュエンジェモンとかは巻き添えで殺されてたな…。」

「デジモンのレベルは総合的に強さを上げるけど、アレは別種の強さ…恐らく極限まで他を削ぎ落して斬る事だけに特化してる。」

「？」

「なんでも斬っちゃうんだ。」

「デジモンも山も空気も…。」

「毫碌してるのか、敵味方の区別もなく近づけば斬るし、どんな騒ぎになってもシエルは我関せずとずっとゲート前にいる。

…恐らく、アレは闘いの一点だけなら、デーモンより強い。」

「そんな…馬鹿な。」

「[[[[…]]]]」

ヴォーボモンは全員の沈痛な沈黙に冗談でない事を悟った。

「嘘…。」

「それでも、他のゲートじゃなくてこのゲート1じゃ駄目か？」

「…ごめん。」

理由は、自分でも分からない。

でも、ここじゃなきゃ駄目な気がするんだ。」

「ゲート自体は様々なところに繋がってるし下手したら次元も時代も違うかもしれないもんね！特に不安定な今はなおさら！わたしも賭けるならヴォーボモンくんの直感の方だと思うよ！」

「だから…僕一人で行くよ！」

皆んなを危険に巻き込めない。」

「んふっ…ほら言うと思った！でしょ叶？」

「昔っからそうだもんね、ヴォーボモン。」

「そういうところは流石勇太にそっくりだよ。」

「これも何かの縁！言ったでしょ！助け合いだって！」

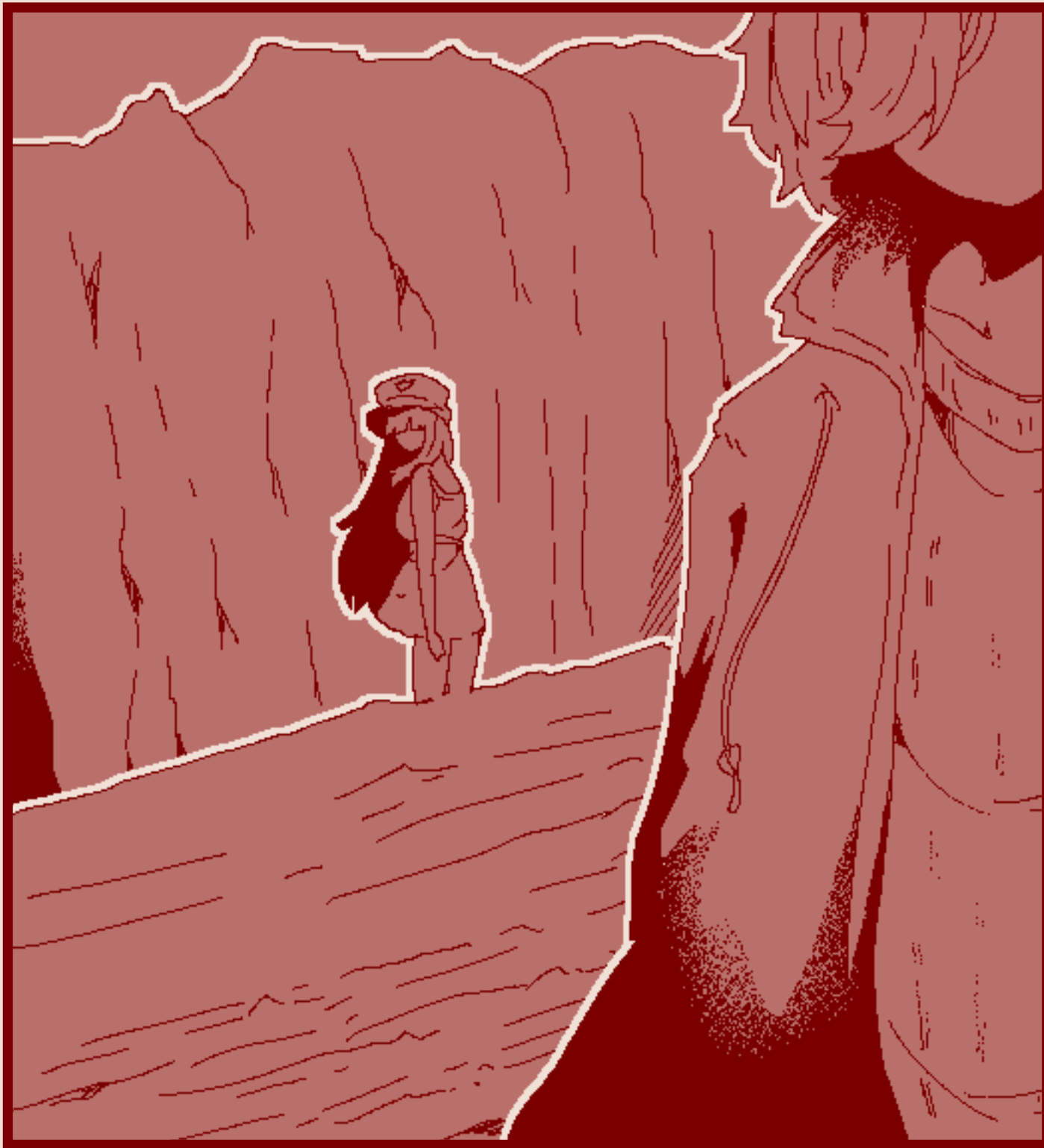
「みんな…。」

ヴォーボモンは涙ぐみながら声を絞り出した。

「ありがとう。」

「泣いてる暇はないぞ、これから伝える作戦、しっかり聞けよ。」

「うん！」



ヴォーボモン達が寝静まった後に叶はひとり、ゲートの方を見上げていた。  
ゲートはムゲンマウンテンの頂上付近。  
初めて、勇太達がデーモンと接敵した付近であった。

「叶くん、寝れないの？」

「希理江さん…？希理江さんこそまだ起きてたんですか？いつも早寝なのに？」

「…叶くんの様子が気になってね。」

「？」

「叶くん、もしかしてここで死んでもいいとか思ってない？」

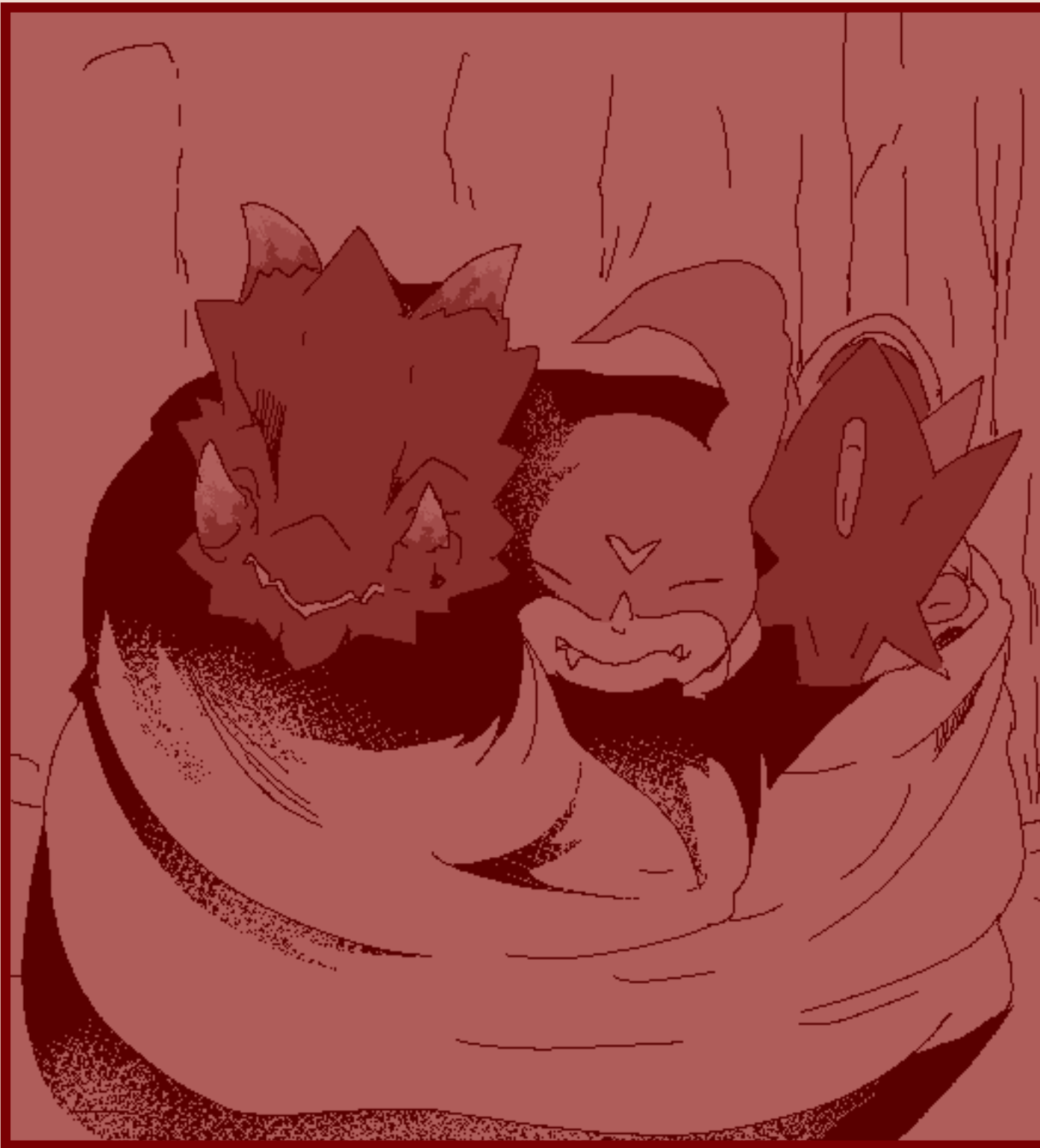
「えっと…意味が…」

「誤魔化しても駄目だよ。」

明日の作戦、わたし達が危険って言ってたけど本当に危ないのは叶くんとブイモンだよ？それを分かってない叶くんじゃないよね？」

「…。」

「…わたしね、もう友達が…大切なひと達が死ぬのは嫌だよ。」



叶は寝ているブイモン達の方を見た。  
「ふっ…大丈夫ですよ。  
確かに、助けてくれた勇太の…ヴォーボモンの助けになりたい。  
その為なら命だって掛けてもいい…俺とブイモンはそうは思ってます。」  
「…やっぱり。」  
「だから、違いますって。  
あいつ…ブイモンって結構甘えん坊なんですよ。  
俺と同じようなコート欲しいって駄々こねて、結構可愛げがあって。  
俺…あいつの事全然知らなかったんだなって…  
それに鬼塚ともしっかり話してみたい。  
勇太ともまた、どっか遊びに行きたいんです。  
死ぬ気でやります。  
でも、決して死ぬ気はありません。  
まだ、見たいものも知りたいものも俺には…俺達にある。  
ただ、その為には今までみたいに逃げてちゃ駄目なんです、命懸けてでもやらな  
きゃいけない時なんですよ。」  
「ただ、なんとなく上手くいく気はするんです。  
怖いけど…自分に後ろめたくない。  
あいつもきっとこんな気持ちだったんだなって…そう思うと。  
…だから、大丈夫です！」  
叶はニッと笑って見せた。  
「…わかった！わたしも信じるよ！」  
「ええ、信じてください。」  
「ねえ、叶くん！」  
「？」  
「あいつって勇太くんだよな？  
今の叶くんいい笑顔だった！勇太君もきっとそうやって笑うんでしょ？  
わたしもいつか勇太くんと会ってみたいな！」  
「ええ…そんな機会…これからならいつでもありますよ…きっと。」



「それじゃあ手はず通りに!」

「分かった!叶くん達も気を付けて!」

「希理江!ジャザモン!」

「?どうしたのヴォーボモン?」

「ありがとう!」

「「にっ!」」

霧の深い朝、天使達の視界を遮る今。

ジャザモンが、ジャザリッヒモンに進化し、希理江が乗る。

叶とブイモンは、ラヴォーボモンに乗りゲートへ向かう。

ヴォーボモンを MW に送り出すための作戦が始まった。